

過越祭にエルサレムに来ていた何人かのギリシア人がフィリポのもとに来て、「イエスにお目にかかりたいのです」と頼みました。フィリポはアンデレと共にイエスのもとに行きます。この二人は 1:35～49 の記事からイエスと求道者との出会いを仲介するような役割を担っていたのではないかと思います。二人がイエスに何と言って取り次いだのかを聖書は記していませんが、その時のイエスの答えが 23 節以下に記されています。しかし、イエスの答えは答えになっていません。イエスは「自分が栄光を受ける時が来た」と話した、と記すのです。この世的な視点で見れば、12 章のイエスのエルサレム入城、つまり群衆がなつめやしの枝を振りながら、「ホサナ。……イスラエルの王に」とイエスを歓迎した時が最も栄光を受けた時でした。しかし、この福音書はイエスが受難を受けて十字架で死に、復活させられる出来事が栄光の時としています。それは、その時こそ人間の根源的な罪が贖われ、神さまの救いの御業が成し遂げられるからです。そして、イエスは、一粒の麦の譬えにより、麦粒は蒔かれると粒自体の形はなくなり死ぬが、それによって多くの実を結ぶのと同じように、自身も十字架で死ぬことによって多くの実、新しい命に生かされている人々の群れが生まれると話した、と記すのです。イエスはこの譬えにより十字架によって何が起こるかを明確に示したのです。イエスに従い、イエスの十字架の死によって実る多くの実りに与って歩むのであれば、イエスはいつも共にいると言うのです。イエスの死による豊かな実りとして私たちが生かされるとは、どういうことであるかが、25 節に記されています。25 節は分かりにくい訳ですが、本田哲郎神父は「自分自身に執着する者は、自分を滅ぼし、この世にからめ取られた自分自身をにくむ者は、永遠のいのちに向けて自分を守りとおすのだ。」と訳しています。イエスはこれらのことをギリシア人に対する答えとして話しました。それはイエスの一粒の麦としての死、十字架の死、がユダヤ人たちのためだけのものではなく、異邦人をも含めた全ての人に開かれている救いであることを示しています。この後、イエスが彼らに会ったかどうかは明かではありません。しかし、それは重要なことではありません。イエスとの出会いとは地上でイエスに出会うかどうかではなく、復活させられ、今も十字架につけられてしまったままでいるキリストを受け入れるかどうかだからです。また、私たちがイエスに倣い、従うことによって、一粒の麦となり、十字架に死なれたイエスを指し示す者とされるのです。「一粒の麦」で示されるものは、イエス自身であると共に、それに従う者の生き方でもあるのです。